

2.

古代出雲の国 謎の荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡

2001. 2. 12. kjina.htm by M. Nakanishi

古代「iron road 鉄の道」で繰り広げられた壮絶なドラマ
2000 年前忽然と消えた大量の銅剣・銅矛・銅鐸がその姿を現わした



古代出雲 信仰の中心
神名火山〔仏経山〕



大量の銅剣・銅矛・銅鐸が
埋められていた荒神谷遺跡



大量の銅鐸が一度に出土
加茂岩倉遺跡

古代出雲の国 謎の荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡

1. 荒神谷・加茂岩倉遺跡 country walk
2. 荒神谷遺跡 探訪
3. 加茂岩倉遺跡 探訪
4. 大量の青銅祭祀器埋蔵の謎



日本誕生前夜 古代出雲に花開いた青銅器文化が忽然と消えた。古代日本の「iron road 鉄の道」で繰り広げられた壮絶なドラマ。それを今に伝えるのが 出雲 加茂岩倉・荒神谷遺跡だ。

2001. 4. 1. By M. Nakanishi

古代史の謎

2.1. 加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡 Country Walk



宍道湖の西の端 出雲大社の南 平野部から丘陵にかかる一帯は神話の国古代出雲国。この出雲の国の南側にそびえ、古代信仰の中心であった神名火山(仏経山)の山裾から平野部にかかる谷筋の山の山腹から大量の銅剣や銅矛・銅鐸が並んで埋められているのが発見された。荒神谷遺跡である。

また、ここから南東 3.5km の同じような丘陵地山腹から大量の銅鐸が出土した。〔加茂岩倉遺跡〕

日本各地で個々に発見されている古代銅剣・銅鐸の数を超える量がこの地に一度に埋められていた。弥生時代後期紀元 2 世紀頃と推定されている。

この出雲以外にこれほど大量の青銅器

まとめて発見された例はなく、またこの地が神話に語り継がれる出雲国であったことから、この時代に九州・近畿と並ぶ巨大な王国が出雲に在った事の証拠を提供した。

また、「なぜこのように大量の青銅器が埋められたのか」そしてその後 この地においても 忽然と青銅器は絶え 日本統一が進む古墳時代へと突入して行く。



加茂岩倉遺跡出土 大量の銅鐸



荒神谷遺跡出土 大量の銅剣・銅鐸・銅矛

「この時代 出雲で また 日本各地でなにが起こったのか」この出雲荒神谷・加茂岩倉遺跡の「大量の青銅器出土の謎」については多くの説があるがまだその謎は解けていない。

唯一言えるのはこの時代 「倭の国の大乱」と呼ばれる日本各地での内乱の時代を経て 九州・近畿・吉備・出雲・丹後など次第に統合され各地に王国が形成されて行く。そして、巨大化して行く大和連合。「鉄器」を支配し巨大な勢力を蓄積してきた天孫族大和が次第に各地の王国を従え日本を統一してゆく。大和勢力との戦いの過程で出雲における信仰の中心 国のシンボルであった青銅製祭祀器を隠すため埋めたのであろうか…また 戦いに敗れ 一度に廃棄させられたのか…。

鉄の支配を通じ巨大化した大和勢力との戦いのなかで忽然として消えた出雲の王国 その文化の象徴が荒神谷・加茂岩倉遺跡に大量にかくされた青銅器であったのではなかったか……。

古代中国・朝鮮半島から続く「鉄の道」が日本国内を進んで行く過程でおこった「青銅器文化の謎」。

古代日本の「iron road 鉄の道」で繰り広げられた壮絶なドラマ それを今に伝えるのが 出雲 加茂岩倉・荒神谷遺跡だ。

本年2月 米子の娘のところを訪ねる機会があり、娘たちとそして 誕生を迎え用としている孫娘と一緒に念願の荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡を訪ねることが出来ました。

まだ少し肌寒い1日 どちらの遺跡にも人影なく、静かな森の中で古代に思いを馳せました。

縄文時代には 既に日本各地との交易が盛んに行なわれていた事が青森山内丸山遺跡の遺物からわかっている。そして弥生時代 戦乱の大陸や朝鮮半島からの季節風に乗ってやって来た多くの渡来人が多くの技術や文化を日本に持ち込んだ。大陸や半島から九州・瀬戸内・畿内へと続く瀬戸内の交流路と同時に 日本海沿岸にもまた時代を超えて大陸との交流路が続く。北九州・山口土井ヶ浜・出雲・伯耆の国麦晚田・丹後・北近江・越へと。

そして 九州各地 瀬戸内・畿内 そして 出雲など日本海沿岸に多くの国々が出来、相互に交流史ながら文化の花を咲かせる。そして巨大化する勢力が統合へ向けての戦乱の世が続いてゆく。

そんな中で 青銅器の文化が花咲いた出雲。

「この大量の青銅器を作った人達はなぜ一度にこれを捨てたのか？」

「敵から奪われるのを避けて隠したのか？」

「ヤッパリ強力な鉄の武器を持つ大和の勢力との戦いの為に神名火山が望める神聖な地に隠し自分達の 国のシンボルを守ろうとしたのか？」

「出雲オオクニヌシノミコトの出雲国譲りの伝説と出雲大社縁起の伝説はこの争いを伝えているのか？」

根拠はないが次々と話は広がって行く ちょっぴり知っている事を披露してご満悦。

古代の遺跡など日頃全く興味のない娘夫婦もびっくり。「この娘が大きくなった時には 教科書にこの遺跡のっているだろうか 自分がこんな凄い遺跡に行ったことおもいだすやろか・・・」などと言っていました。

現代の生活空間からは離れた山裾の森の中。「こんなところになぜ・・・」と思うような山腹で「本当に良く見つかったなあ」と思います。

日本誕生と鉄の関わりの凄さにおもいを馳せ、孫娘の未来にも思いをはせた心地よい1日でした。

2001. 2. 12. 出雲 謎の荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡を訪問して

by M. Nakanishi

大量の銅剣・銅矛・銅鐸が隠すかのように整然と埋められていた

2.2. 出雲荒神谷遺跡探訪

島根県簸川郡斐川町大字神庭西谷

2001. 2. 12. by M. Nakanisi



荒神谷遺跡は、「出雲国風土記」に記されている神名火山（仏経山）の東約3 km、高瀬山北麓の低丘陵地帯に散在する小さな谷あいの一つにあります。

この荒神谷 神名火山の山裾の丘陵斜面から大量の銅剣と銅鐸・銅矛が相次いで見つかりました。現在は周辺の丘陵地をふくめた広大な史跡公園として整備され 誰もがおとずれられる森林公園になっています。

弥生青銅器が出土した地点は、標高28mあまりの小さな尾根の南斜面中程です。この地点は農道の予定地に決っていたため、県と町教委で分布調査を行い、県教委で遺跡の調査を行った結果、まったく幸運にも昭和59年7月、358本もの大量の銅剣が発見され、さらに翌60年、前年銅剣が大量に発見された場所から約7mはなれた隣接した場所から銅矛16本、銅鐸6個が一度に発見されました。

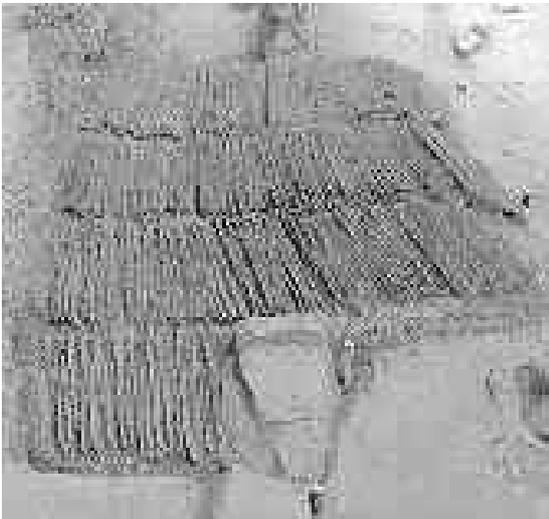
今も発見された時と同じようにレプリカが置かれまじかに発見された様子が見られるとともに、周辺の丘には遊歩道が整備され 青銅器が埋められた山腹全体が眺められるようになっています。



神庭荒神谷遺跡で 2001. 2. 12.



整備された発掘現場 左銅剣 右銅鐸・銅矛（西側）



発見された銅剣



発見された銅鐸・銅

左の写真は発見された銅剣の状態を示していますが、手前から一列に34本、111本、120本、93本の銅剣が、整然と並び、刃を起こして密着した状態で出土しました。日本全国の総出土数を上回る358本もの大量出土は、出雲に巨大な勢力が存在していたことを裏付ける証であり、古代史や考古学界に大きな波紋を投げかけた。これらの銅剣は弥生時代後期（2世紀）「中細形銅剣」類（あるいは「出雲型銅剣」）と呼ばれ、朝鮮半島産の鉛を使っているものが1本残り357本は中国産の鉛を使っていることが分かりました。

このうち100本以上に、刃の部分が刃こぼれのように「ぎざぎざ」が浮き出たものや、鑄型のずれによって刃表面に段差が出来たり、茎がゆがんだりしたままのものなど仕上げの不十分な剣が見つかった。

また328本の銅剣の茎（なかご）部分に「×」印が刻まれていました。

加茂岩倉遺跡から発見された銅鐸にも「×」印があったことで、荒神谷遺跡との関連が注目されています。

銅矛16本の長さは69センチから84センチで、実用品ではなく武器形の祭器だったと考えられます。

刃の部分はキラキラと輝く効果をねらって綾杉状に研ぐ方向をかえているものがある。

佐賀県の検見谷遺跡の銅矛と非常によく似ており、九州で矛製作されたものと考えられています。

また、銅鐸は6個、1号銅鐸は、吊り手の断面が二段になっていることや重弧文・市松文が描かれていることなど近畿地方では見られない大変個性的な銅鐸であり、5号銅鐸は吊り手の断面が厚い菱形であることから最古段階の銅鐸で内面にある突帯が擦り減っていることから長期間にわたって「カネ」として使用されたと思われます。

また、これら銅鐸の成分は、出土した大量の銅剣の成分に含まれる銅、鉛、スズや不純物の混合比率が一致することが分かり、どちらも出雲で製作された可能性があります。

銅鐸は近畿、銅剣は九州を中心とした文化圏とする考古学の通説に見直しを迫ることでなっています。



荒神谷遺跡の銅剣の柄に〔×〕印



岩倉岩倉遺跡出土の銅鐸にある〔×〕印

銅剣の柄にあった〔×〕印と加茂岩倉遺跡銅鐸の表面にある〔×〕印

〔×〕印の線刻は銅剣の柄（つか）に差し込む茎（なかご）にみられ、約1センチ四方の大きさがある。刻まれた理由は「工人グループのマーク」か「銅剣の祭り」の祭主の家紋」ともみられている。また、粗雑な作りの多い理由としては、銅剣や銅鐸などの青銅器はこれまで権力者や神の力を誇示するための儀式に使った後で土中に埋めたとする説が有力だった。しかし、弥生後期は稲作が富の象徴として確立する時期に当たり、宝器として見せるよりも、豊作を祈り地の霊に捧げるため、最初から土中埋納用に生産されたものとする説があります。

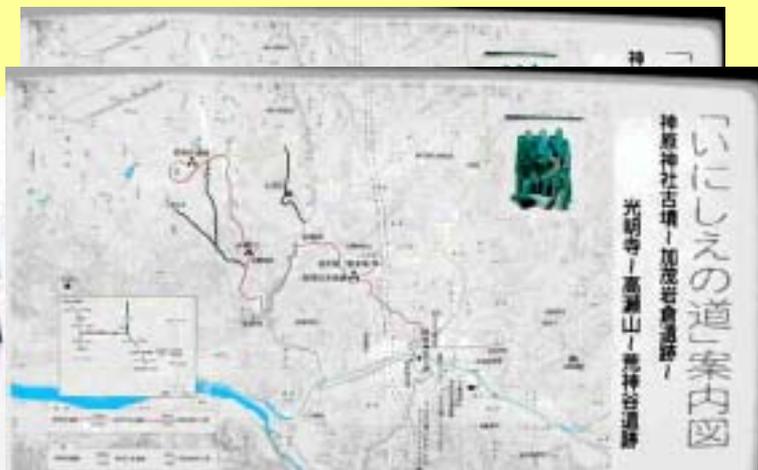
「なぜ 出雲で文化圏の異なる銅矛・銅鐸・銅剣が大量に見つかったか」については、出雲の国がもともと朝鮮半島・大陸からやって来た航海術にすぐれた渡来人が作った海の民の国であり、出雲が日本海を中心とした交易の集散地として、これら青銅器の工人も住みつきここで大量に作られた銅剣・銅鐸が全国へ配られたとする説もある。

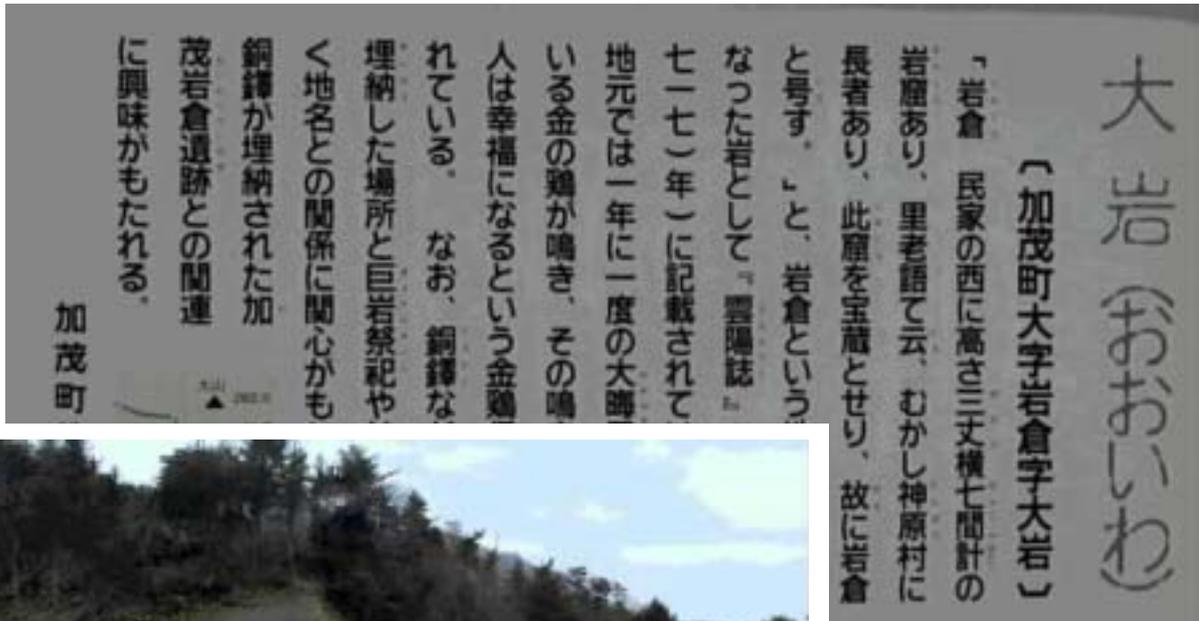
古代出雲の国 謎の荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡

出雲で作られた大量の銅鐸が約2000年 山中に隠されていた

2.3 加茂岩倉遺跡探訪

島根県加茂町大岩 2001. 2. 12 by M. Nakanishi





1996年10月14日加茂町の農道工事現場である丘陵地の山の中腹で39個もの銅鐸が埋まっているのが発見された。大量の銅剣が埋められていた荒神谷遺跡から南東へ約3.5kmはなれた仏経山の麓の谷に面した丘陵地の山腹である。また、加茂岩倉遺跡から少し行ったところに神原神社古墳があり、そこからは、邪馬台国・卑弥呼が魏に使いを送った年と言われる景初3年の年号の入った三角縁神獸鏡が発見されている。これら青銅器はいずれも出雲の国の祭祀と深く関わっていると考えられる。

銅鐸・銅剣・銅矛は弥生中期（紀元前1から紀元1世紀）のものでこの青銅器祭祀は弥生後期〔3世紀〕に出雲を中心に鳥取・富山などに四隅突出型方墳が現れてくると消えてしまう。

四隅突出型方墳の出現とは少し年代がずれるが、新しい勢力の伸張により、旧勢力である出雲が青銅器を集め、埋め隠すことをしいられ、加茂岩倉・荒神谷遺跡が形成されたと考えるとこの加茂岩倉・荒神谷遺跡の謎も理解出来る。

また この新勢力の伸張にはたした「鉄」の役割はおおきい。大和政権を打ちたてた天孫族 四隅突出方墳を作った伯耆・丹後・越などの諸王国が大陸・朝鮮半島を含め「鉄の覇」を競ったに違いない。

古代製鉄を勢力伸張の中心に据え 長年にわたり、iron road 鉄の道を巡って 諸国間の抗争が続き、この過程で出雲青銅祭祀器の埋蔵を「鉄の新しい王国に屈服していく中での抵抗の象徴」として見るとこの加茂岩倉・荒神谷遺跡の謎も解けてくる。

文化をも抹殺する力を持った鉄のすごさがここでも見える。



加茂岩倉遺跡のある大岩郷遺跡
正面が大岩〔岩蔭〕岩倉遺跡は反対側

2月12日 朝早く 娘夫婦の案内で米子を出発して国道9号線を松江の方へ。松江の市内を避け玉造から南へ折れて丘陵地を西へ15分ほどで加茂岩倉の郷へ。ちょうど山陰高速道の工事が急てんぽで進んでいる谷合の道路際に岩倉の名の発祥の大岩 岩蔭が見て取れる。街の喧騒の中を脱し、四方丘陵地に囲まれた谷合の静かな場所である。冷たい風が吹きぬけ、朝霧の中「神おわす場所」の感じである。駐車場に車を置いて、谷合の道を10分ほど谷合を入ったところに加茂岩倉があった。今 史跡整備中と見え 足場が幾つも組まれていた。



加茂岩倉遺跡入口
右手の丘の上が遺跡



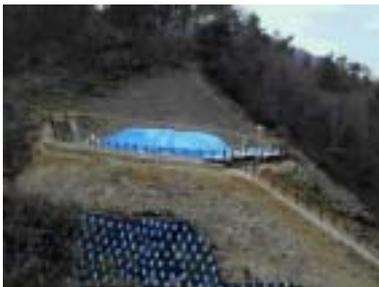
加茂岩倉遺跡からもと来た道
遠方に島根半島を望む



本当に四方いずれも山裾が迫る狭い 谷のどんつきでどこにでもある山間の谷の中。隠す場所としては最適であったろう。大量の銅鐸が埋められていた位置は思ったよりも高く、谷合の道からは数10メートル上の山腹にあり、今高い階段と遊歩道の工事がされている。

本当にまわりには何の目印もないそれとって特徴のない谷合の枝分かれした支谷の山腹に約2000年にわたって隠されていた銅鐸。

どんな思いであったろうか……。



加茂岩倉遺跡への階段

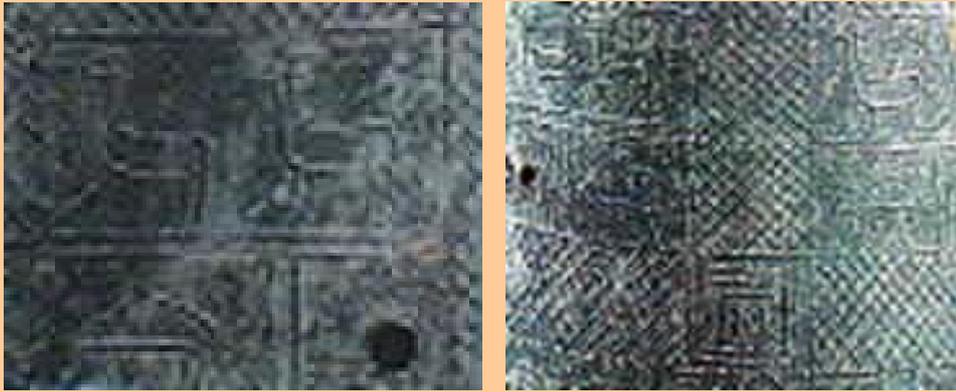
私の知っている銅鐸は神戸の海から見渡せる山々から出土した大型の銅鐸。全く置かれた環境が違ったろう。

寒さに震えつつ、ここに銅鐸を埋め去って行った人達の思いを夢想しつつ、神庭荒神谷に向った。

2001. 2. 12. 加茂町大岩 加茂岩倉遺跡にて

by M. Nakanishi

加茂岩倉遺跡の銅鐸



加茂岩倉遺跡で発見された銅鐸の中 幾つかの出雲特有の紋様



加茂岩倉遺跡から出土した39個の銅鐸は、一箇所からの出土としては全国最多です。出土した銅鐸は弥生時代中期ごろに作成された古い形式のものと、新しい形式のものがあります。文様は流れるような流水文と帯を縦横に画いた袈裟襷文（けさたすきもん）と呼ばれるもののいずれかです。

銅鐸の大きさは形式ごとに大きさがそろっており、古く小さいものが約30cm前後、大きいものが約45cm前後で、銅鐸の多くは、大き

なものの中に小さなものを入れた入れ子の状態で発見されたものが

12組あり、その他3組も入れ子だったと推定されております。また、現在加茂岩倉銅鐸の内15個26個については、同じ鋳型で作られた、いわゆる兄弟銅鐸が存在することがわかっています。

発見された銅鐸のうち、幾つかは土製鋳型で作られ その紋様に近畿地方にない特徴があることや、その成分が荒神谷で出土した大量の銅剣とほぼ一致することなど、出雲ないしその周辺の職人の手によって作られたと考えられるふしが幾つか見つかかり、今までの考古学の常識を覆すと共に、出雲に出雲特有の文化をもった巨大な国



銅剣の柄の〔×〕印



銅鐸〔×〕印

があったことを推察する発見となった。加茂岩倉銅鐸の中で最も注目されるのは、銅鐸の身の上にシカ、トンボ等の絵画を画いた18・23・35号銅鐸であり、出雲あるいはその周辺で作られた可能性が最も高いと考えられる銅鐸が、この3個である。こらには出雲

以外では見つかっていない文様があります。例えば35号鐸には、袈裟襷（け

さたすき）文の交わる部分に、四角い文様が何重にも描かれています。

また23号鐸の鹿の下に書かれた動物も特徴的です。一説にはイノシシといわれているが、昆虫という説もあり、真相は謎につまれています。また一般に、袈裟襷文銅鐸は横帯が優先しますが、18号、23号、35号鐸は横帯と縦帯が交差しているのも大きな特徴です。また、出土した銅鐸の中の作った後荒神谷遺跡から見つかった銅剣の大半に着けられたと同じ「×」印をしたものが13個見つかっている。

2.4. 青銅祭祀器 埋蔵の謎

古代日本の「iron road 鉄の道」で繰り広げられた壮絶なドラマ
それを今に伝えるのが 出雲 加茂岩倉・荒神谷遺跡だ



荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡で発見された大量の青銅器が何時埋められたのかは土器など年代を特定出来る遺物が出土せずはっきりしないが、埋められた青銅器の中で最も新しいものである大量の銅剣が製作されてまもなく弥生時代後期 2世紀頃 日本国中が「倭の大乱」と魏誌にかかれた時代と考えられている。

日本が邪馬台国はじめ多くの国々に分かれていた時代から、大和・天孫族により次第に統一され、大和政権が成立して行く「日本国誕生」の前夜 古墳時代の幕開け前の時代である。

この時代は大陸・朝鮮半島と日本の諸国との間には密接な交流があり、また、陸・朝鮮の戦乱をさげ、大陸・朝鮮半島から多くの渡来人がやって来た時代でもある。

朝鮮半島から 季節風に乗れ、壱岐・対馬をへて北九州に渡るルートがあり、また朝鮮半島 釜山付近から北西の季節風に乗ると用意に出雲・伯耆・丹後・越の国に至る。この日本海沿岸への大陸からのルートも広く使われていたと考えられ、人々の交流ばかりでなく 稲作の技術 土器 そして 青銅器・鉄器など数多くの技術が渡ってきた。

そして 日本各地にこれらの人々が住みつき先住の人達と融合しつつ多くの国が出来てきた。

出雲もその例にたがわず北九州の影響を受けつつも大きな国が成立していた。

出雲風土記などに語られる神話からは交易を支配した海の民が九州からやって来て次第に定住し王国を作ったと考えられている。

神名火山を信仰の中心として出雲の国の人々の心をつなぐ重要な祭祀が行われ、この儀式の中心に青銅製の祭祀器が使われた。また、同じ流れを持つ同盟の国々をつなぐ心柱としてこれらの青銅器製祭祀器がくばられることもあったろう。当初 北九州・畿内で作られたこれら青銅製祭祀器が出雲の国が巨大になるにつれ、これらの工人を出雲に住ませ、紋様などに独自の手を加え、出雲独自の文化に仕上げで行ったに違いない。

同様の流れは出雲ばかりでなく、九州・瀬戸内海諸国・畿内そして日本海沿岸各地で起こっていたに違いない。そして 日本各地でだんだん勢力を伸ばしてきた国々が衝突。戦いに敗れた国は併合され、独自に培ってきた文化も抹殺されてしまう。こんな事が日本各地で起こったであろう。

魏誌に書かれた「倭の国の大乱」の時代を迎える。この戦乱を支配したのは圧倒的に強力な武器となった鉄器である。大陸・朝鮮半島からの鉄器供給ルート並びに鉄器加工技術を持った国が次第に勢力を伸ばす。恐らく このルートの支配を巡って 朝鮮半島の諸国と日本各地の国々の交流は益々活発となり、

大和 吉備 出雲 伯耆 丹後 越 など日本各地で国々の連合が進み、大きな勢力に成長し、各種祭祀を伴う独自の文化圏を築いて行く。そして やがては これらの連合国どうしが相互に争う事となり、ついには、鉄のルートを支配し、独自に鉄器加工技術をいち早く身につけた大和が日本各地の王国を支配して行く。まさに 日本誕生のドラマが展開されようとしていた。

出雲も必死の抵抗を行なったであろうが、この潮流に飲み込まれた。しかし、出雲の勢力は強く簡単には征服されなかったのであろう。

しかし、抵抗も続かず出雲神話オオクニヌシノミコトの国譲り神話や出雲大社の縁起と神在月伝説に見られるごとく 和睦という名目で征服されて行く。その過程で出雲の心の中心であった青銅の祭祀器が神宿る神名火山のふもと谷に集め隠されたのではないだろうか

この荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡の出現により、出雲神話が俄然真実味を帯びてくる。

荒神谷遺跡の銅剣と加茂岩倉遺跡の銅鐸に刻まれていた×印も注目に値する。

×印は、同一の信仰集団が、埋納の際に、呪術を込めて刻んだと推定され、製作年代がまちまちな銅鐸と、製作して間もない大量の銅剣が同時に埋納されているのである。

青銅器の変遷は、戦乱が大規模になったのに伴い、より強力な呪力を求めて、九州では銅矛を、瀬戸内海では銅剣を、近畿・東海では銅鐸をそれぞれ大型化する。

しかし、そうした呪力の強化も、新たな思想と信仰を掲げ、豊富な鉄器で武装し、百戦錬磨の戦術を駆使する征服者集団(記・紀に見える天孫族)の力には及ばず、民衆の祭祀は弾圧され、青銅器は相次いで消滅し、初期大和政権の成立、古墳時代の幕開けという大きな画期を迎えたと……。

古代日本の「iron road 鉄の道」で練り広げられた壮絶なドラマ それを今に伝えるのが 出雲 加茂岩倉・荒神谷遺跡だ。

2001. 3. 18. 荒神谷・加茂岩倉遺跡を整理して

by M. Nakanishi

古代出雲の国 謎の荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡

〔完〕

1. 荒神谷・加茂岩倉遺跡 country walk
2. 荒神谷遺跡 探訪
3. 加茂岩倉遺跡 探訪
4. 大量の青銅祭祀器埋蔵の謎